

無償幼稚園における子どもの生活形態と母親教育

—— ケート・D・ウィギンの実践を通して ——

橋 川 喜美代

(キーワード: ケート・D・ウィギン, 無償幼稚園, 生活形態と母親教育)

はじめに

アメリカにおける1870年代の幼稚園の発展は、貧困・犯罪・衛生といった都市問題と対にして語られることが多い。いわゆる移民の流入に伴う大都市の貧児の救済事業として、幼稚園は万能薬のごとく宣伝され、各地に発展した。

バンデウォーカー (Vandewalker, N.A.) は1880~90年までを「協会時代」と呼んでおり、1897年までに、400を超える幼稚園を支援する組織や団体が誕生した¹⁾。その先陣をきったのが、サンフランシスコ公立幼稚園協会 (The San Francisco Public Kindergarten) とゴールデンゲート幼稚園協会 (The Golden Gate Kindergarten Association) である。

サンフランシスコ公立幼稚園協会は1878年、ニューヨークの倫理文化協会の創立者アドラー (Adler, F.) の講演に刺激された博愛家たちによって結成された。この協会によって設立されたのが、シルバー・ストリート幼稚園である。無償幼稚園は、スラムの子どもたちに欠如しているしつけや、秩序ある行動を教えることによって、将来の善良な市民の育成を目指すことにとどまらず、人類の道徳性の再生に向け、親も巻き込んで、家庭は言うに及ばず、社会改良の手段として期待された。博愛家たちによって各地に開設された無償幼稚園は、その教育原理によって、①作業中心の労働教育型、②遊び中心の保護施設型、③作業と遊びを生かした人間教育型、の3類型に分類される²⁾。

第3類型に属するシルバー・ストリート幼稚園を指導し、成功へと導いたのは、児童文学『少女レベッカ』の著者としても知られるケート・W・ウィギン (Wiggin, W.D.) ある。そして、1879年に、シルバー・ストリート幼稚園を見学し触発されたクーパー (Cooper, S.B.) は「放任された子どもたちのために無償幼稚園を設立することによって、より優れた国民性の基礎を確立すること」、そこに自らの伝道を見つけ出し、自ら務めていた長老教会派に属するバイブル・クラスのメンバーと謀って、ジャクソン・ストリート幼稚園を設立した。無償幼稚園の事業拡大とともに、ゴールデンゲート幼稚園協会が1880年に結成された³⁾。協会の発展は目覚ましく、園数18、園児数1500名、保育者 (園長や助手を含め) 36名を越えるまでに成長した⁴⁾。

さて、フィッシャーは「ウィギンと妹ノーラ・スミスによって指導されて有名となったシルバー・ストリート幼稚園ほど広い名声を博し、子どもたちの間でも彼らの家庭においても成功を勝ち得た幼稚園はない。シルバー・ストリート幼稚園で為された事業は、カリフォルニアにおけるその後のすべての事業の原動力であり、数多くの無償幼稚園の設立や幼稚園協会の結成」に重大な影響を与えたと言う⁵⁾。シルバー・ストリート幼稚園の成功は、ゴールデンゲート幼稚園協会の設立を触発し、やがて公教育体系に幼稚園を編入させる契機をもたらした。

ウィギンの保育の特徴は、カウンセラー、医者、母親、守護者といった役割を一人でこなし、子どもは言うに及ばず親たちとの信頼の絆を結び、幼稚園=恩物・遊戯を教える場と化したフレーベル主義保守派の保育とは異なった子どもの生活の組織化を図った点にある。本研究は、幼稚園に創り出された子どもの生活形態に注目しながら、ウィギンの師であるドイツ人幼稚園運動家マーウェデル (Marwedel, E.) の子ども観・保育観が彼女に及ぼした影響を探ることを目的とする。

I. フレーベル主義幼稚園の普及とケート・D・ウィギン

1. フレーベル主義幼稚園の普及

植民地時代からアメリカ人の精神を支えてきた、カルヴィニズム的子ども観は、19世紀における福音主義的傾向をもつ超越主義の台頭によって、子どもの内面を発見しようとする子ども観へと転回し始める⁶⁾。1830年代に顕著となる子ども観・女性観の変化は、植民地時代のカルヴィニズム的子ども観を支えた家父長制度が工業化に伴って崩壊し始めたことによるものであった。カルヴィニズムの原罪説的子ども観に立脚した宗教教育は、父親の厳格な罰によっ

て子どもの自律性を抑圧し、意志を挫くことを強調していた。子ども観の転換は、子どもに外的服従ではなく、内面的、自発的服従を求めるようになる。これを支えたのが女性観の転回である。工業化の進展は、女性を労働分野から締め出し、家庭こそが女性の領域だといった「家内性」礼賛イデオロギーを浸透させていく。これは女性の直観と感性が、子どもの性格形成にもたらす影響力を強調し、女性が教育に果たす役割を規定した⁷⁾。この子ども観・女性観の転換が、幼稚園を受け入れる素地を築き上げた。

フレーベル主義幼稚園は、ドイツ人移民の手によって導入された。最も古いと言われているのが、マルガレーテ・シュルツ (Schulz, M.) が1855年にウィスコンシン州ウォータータウンに設置したドイツ語幼稚園である。1870年代までに、こうした幼稚園は10園程度で、英語幼稚園はわずかにピーボディ (Peabody, E.) が1860年にボストンに設立した1園にすぎなかった。自園の教育的経営に行き詰まりを感じたピーボディは、1867年に訪欧し、ドイツ人幼稚園指導者たちを来米させ、幼稚園教師の養成を開始した。

また、ピーボディはセントルイス市の教育長ハリス (Harris, W.T.) に働きかけ、同市での公立幼稚園の実験を強く要請した。1873年、セントルイス市に公立幼稚園が誕生。これを指導したのがフレーベル主義保守派の旗手、ブロー (Blow, S.) である。ハリスが目じた遊戯・ゲームの価値は、子どもが自由と自己決定をもって、自発的に集団の秩序やルールに従う点にあった。しかし、公教育体系に編入するための効率性追求や、2部制による経費節減は、一斉画一的な指導体系に基づいた恩物や遊戯・ゲームの教え込みを強化し、子どもたちの園生活を固定した時間割によって、小刻みに分断させていくことになる⁸⁾。

知識人によって推進されてきた幼稚園が一般大衆に認識される契機となったのが、1876年のアメリカ独立百年を記念するフィラデルフィア万国博覧会であった。ピーボディを中心とするボストン・フレーベル協会が支援した婦人館別館に展示された博覧会幼稚園では、ニューヨークにあるクラウス・ベルテ (Kraus-Boelte, M.) の幼稚園教員養成校で養成されたウィスコンシン州出身の元小学校教師バリット (Burrill, R.) が実演を行った。対象となったのは近隣の慈善ホームに預けられていた孤児たちであった。この実演は、「見学者の人垣が常に押し寄せ、見学者の多くは『楽しいコーラスに引き寄せられ、愛らしい光景によって魅惑された奴隷』のごとき者であった。数千もの人々が新しい教育部門を見るために集まり、多くが質問のために数時間もとどまる」ほどの好評を博した⁹⁾。

その一方で、ピーボディやクラウスらが批判したのは、セントルイス幼稚園、アメリカ幼稚園の実演である。ブローによるセントルイス幼稚園では、子どもたちに課せられる手仕事が難解すぎることや、幼稚園は単に子どもたちに愛らしい装飾品を作らせる技巧を習得させる場ではないといった批判がなされた。また、アメリカ幼稚園では、積木で「生きた神の宮」を作らせたり、幾何学的形態の本を導入するなど、アメリカ化された宗教教育や知的教育への批判が相次いだ¹⁰⁾。

ところで、東京の帝国ホテルを建てた建築家フランク・ロイド・ライト (Wright, F.L.) の母親アンナは博覧会で狂信的なフレーベリアンとなった。アンナはフレーベルの恩物・作業などを購入しただけでなく、幼稚園教員養成校に通ってフレーベル (Froebel, F.) の教育論や方法を学び、9歳になっていたライト1人の幼稚園を家庭に造ったのである¹¹⁾。ライトはこの恩物によって、自らのデザイン感覚の基礎や、すべての形の自然発生の裏にある、基礎的幾何学としてのシステムを学んだと言う¹²⁾。

博覧会幼稚園の実演は、一般的観衆の興味を喚起した。そして、こうした幼稚園を飛躍的に発展させたのが、無償幼稚園の台頭である。1880年頃には、最も価値ある児童救済機関と認められた無償幼稚園事業は流行のごとく、金持ちの若い女性たちの間に普及していく¹³⁾。

2. ケート・D・ウィギンと幼稚園教育

ケート・D・ウィギンは、1856年9月28日、法律家ロバート・N・スミスとヘレン・E・スミスの長女として、フィラデルフィアに誕生した。幼少期をメイン州ポートランドで過ごしたが、3歳の時、父親が亡くなった。彼女が7歳の時、母親は医者であるブラッドバーリー (Bradbury, A.) と再婚。メイン州ホーリスに転居したが、そこはケートとノーラ、ホーリスで生まれたフィリップの3人のきょうだいにとって、思い出の場所となった¹⁴⁾。

ケートが自伝で語っている遊びは、もはや都市の子どもたちには味わえない内容であった。木の小枝で家を作り、紙人形やわら人形をお客に、割れた磁器のお皿を使ってパーティを開いた。バラの花弁で飾った赤砂糖のケーキを紙で包み、1週間ほど地面に埋め、祝い事だといっは、掘り出して食べた。また、川を歩いて渡り、金色に輝く小魚を捕らえようと、筏に組んだ丸太の上をあちこち走り回った。春には小川の近くに、サンザシやネコヤナギ、ゼニゴケや沼地の青いフラッグ、野生のスミレ、黄色いタンポポが咲き乱れ、松の木の幹から流れ落ちる樹液を目にすることができる。夏にはイチゴやブルーベリーが実り、遊ぶ時間も長くなる。たそがれや月夜を楽しむことさえできた。

1～2エーカーもある庭には、小さな丘や谷、あちこちに小川や水たまりがあった。道に面して作られた花壇と多くの木々に囲まれ、丘の麓は彼女たちが愛したサコ川へと通じていた。深い緑に包まれた灌木に隠れた静かな小川に、継父はケートたちが捕らえた蛙をそこで育てられるように針金でネットを張ってくれた。ここでおたまじゃくしが蛙に変わるのを待ったり、残酷な少年に足や背中を傷つけられた食用ガエルを介抱したり、小さな蛙を飼育したりして遊んだと言う¹⁵⁾。

彼女はこうして遊んだ幼少期に言及しながら、その重要性を次のように語っている。「この時期は最も重要な年月である。私たちはその後学んでおろそかになる大半のことをここで学び取り、独創性の多くがその過程で消え去っていく。私たちは愛し合い、結婚し、成功の程度に差はあるものの、最後には死んでいく。しかし、その最初の10年は記憶や想像力の発達に蓄えになったり、現実の生活から生み出される全ての長いルーツを育むといった点で、残りの年月よりも私たちにってはるかに多くのことを果たしている」¹⁶⁾。

継父は村の学校にケートを通わせた。しかし、その内容に不満を持った継父は、自ら教育する決心をした。彼女は6×7がどうして67にならないのか、「掛け算の九九はどこが優れているのか？ それらは人を幸福にも、豊かにも、英雄にもしない」と算数には手こずったが、それ以外の教科では十分に成功した。家庭での教育では、仲間との交わりが得られなかった。そこで、村の学校に入学したのだが、汚い部屋での生活は退屈を極めた。ケートやノーラは公教育に頼らず、日曜学校の先生の指示に従って、聖書を毎日1章ずつ読み合ったり、シェークスピアやディケンズの本をむさぼるようにして読み続けた¹⁷⁾。

1874年、ケートは中等教育を受けさせたいという家族の期待に応え、ゴードン女子校に進学。ラテン語、フランス語、英語で抜群の成績を修めた後、マサチューセッツ州アンドーバーにあるアボット学院に進んだ。旅先で知り合いの教師からフレーベルやピーボディの名前を聞かされたが、若いケートはオペラ歌手への夢を抱いていた。ケートに幼稚園教師への道を歩ませる転機をもたらしたのは、継父の突然の死である。健康を害してサンタバーバラに転居していた継父の死は、彼女に夢よりも家計を支えるという現実問題に目を向けさせた¹⁸⁾。

1877年夏、ケートはサンタバーバラの著名な女性スイバーランス (Severance, C.M.) と出会った。スイバーランスはボストンでピーボディを通してフレーベルの幼稚園教育を学び、熱心な運動家であったが、ケートにマーウェデルの幼稚園教員養成学校に入学するという重大な決心を迫った。スイバーランスは、音楽や物語の語り手として頭角を現していたケートに、生来の幼稚園教師としての力量を感じ取ったのである¹⁹⁾。

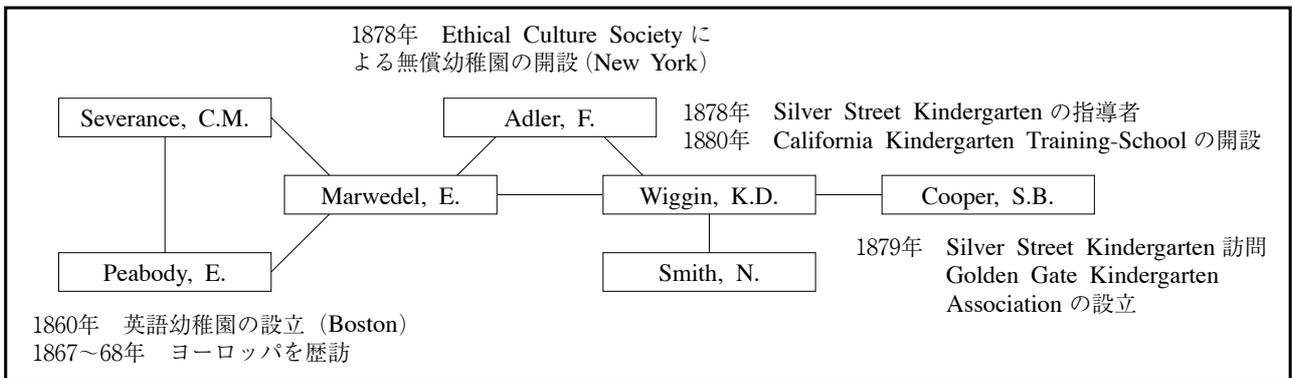


図1 サンフランシスコの無償幼稚園と幼稚園協会

スイバーランスからの手紙を受け取ったケートは、家族会議を開いた。サンタバーバラ大学を卒業した妹ノーラ (Smith, N.) は、立派なフランス語の特待生であり、英語と同じくらいにスペイン語も話せた。ケートが自分の翼で旅立つ話の来る前から、ノーラはいつでも巣立ちできる準備ができていた。家族からの支援を受け、ケートは幼稚園教員養成校入学に必要な授業料と教材費である125ドルを捻出することができた²⁰⁾。

II. マーウェデルの指導とシルバー・ストリート幼稚園の実践

1. ドイツ人幼稚園指導者マーウェデルと教員養成の実際

図1に示したように、ケートの師となったマーウェデルはフレーベルの未亡人ルイーゼから幼稚園教育を学び、ハンブルグの女子産業学校付設幼稚園の指導者であった1867年、ピーボディの訪問を受けた。ピーボディの招きで来米

したマーウェデルは1871年、ワシントンで幼稚園教員養成校を開校。1877年には、スイバーランスの支援を受け、カリフォルニア・モデル幼稚園と太平洋モデル養成学校を開設した。ケートを含む3名の学生と4～7歳児25名が対象であった。

ケートに忘れられない印象を与えたのが、「小さな教師」というサークル・ゲームである。これは新しい仲間と手を取り合って輪になり、一人の子どもが中央に出て自由な動きをする間、「小さなハリー（子どもの名前）を見てご覧。私たちにゲームを教えてください。小さなハリーを見てご覧。さあ、私たちも同じことをしましょう。」と歌いながら、輪の子どもたちも同じ動作をするという遊びである。音楽に秀でていたケートが、マーウェデルに代わって、簡単な旋律を弾きながら歌うと、子どもたちはわずか2分ほどで覚えた。マーウェデルが輪の中央に出てやりたい子を募った途端、エドガーが踊り出た。エドガーは皆を出し抜いて注目されたかっただけで、どんな動きをするかなど考えてもいなかった。マーウェデルがヒントを与えたが、その動きは足を上げたり下げたり、腕をあちこち振り回すだけで、とてもリズムカルであるとか、美的であるとは言い難いものであった。エドガーは次の教師をサークルの中から指名するように言われた時、「もう一方の腕で同じようにしたい」と不満をもらしながらも、ベルサを選んだ。ベルサの動作は淑女らしい礼儀にかなったお辞儀であった。女優のようなセンスで、ベルサは魅力的にお辞儀をやったのけた。サークルの私たちも急いでその動きに倣ってお辞儀をしたが、男児たちは足を突きだし、幾分男性的にやろうと試みた。また、幼い女児たちは足を後ろに引いて頭を下げ、鋭い胃痛を味わっているような格好であった。マーウェデルはベルサの優雅な動きを手本に他児にお辞儀の方法を教えながら、「ベルサは園が始まって2日目だというのに、発明の才を発揮しています。子どもを導く方法がこれでわかるでしょう。」と唸る一方、エドガーの行動観察を抄録にまとめるように指示した²¹⁾。

クラッカーとミルクで軽い軽食の後、粘土細工の時間が30分間続いた。ニンジンとカブを作る予定であったが、4歳児が本物の豚が居るのに気づき、即刻変更された。エドガーは見事な豚を作り上げた。こうした手仕事を観察したケートは、器用な子どもたちは材料を手際よく使いこなし、短時間で作品に仕上げていくことに気付いた。その様子から、器用な子どもたちが4歳児の作業や、余分な湿気で泥化し塑像できない不器用な5歳児数人を手助けできるのではないかと考えた。子どもは小言を言われることもなく、知らず知らずのうちに学んでいく。自分のために2匹の豚を作ることより、未熟な仲間や弱者の手助けができる人に育てようとする幼稚園の手仕事は、常に報酬であって、決して苦行とはならない。ケートは、そこにはより秩序だった親密な世界があるに違いないと確信したのである²²⁾。

12時、帽子が配られ、子どもたちは列に並んだ。エドガーの帽子はまるでぶつかったかのように頭からずり落ちていた。驚きと喜びで泣き出さんばかりのマーウェデルが見守る中、子どもたちはケートの伴奏ののって行進しながら、降園していった。ケートら学生たちの講義は昼食の後、2時から行われた。講義はマーウェデルが講義用ノートを置き忘れるというハプニングで始まった。彼女の話はそのために少々動揺して取り留めのない所もあったが、フレーベルの生涯と業績に興味深い、共感的な素描にとりまとめられた。ケートはスイバーランスから既に借りた本で前もって学んでいたこともあって、マーウェデルの英語力や体系性の欠如した話にも、十分に対応することができた²³⁾。

ケートは数日間の子どもたちの観察から、サークル・ゲームは単調な詩句で想像力を刺激するものではないが、見知らぬ子どもたちをある共通した活動へと統一して行く上で効果的な手段となることを発見した。エドガーを含む25人一人ひとりの観察は飽きることはないほど楽しいものと感じられた。エドガーの協調性を欠いた様子は、大人の枠組みからすれば、問題行動として捉えられる。しかし、彼を責任ある立場に置き、掃除や花壇の水やり、作業用の封筒集め、行進の線引きなど、人目に付く装飾的なサービスを任せるなら、彼の意のままにしたいという思いを伸ばせるに違いないと思われた。マーウェデルの指導は、すべての学生に満足を与えたわけではないが、ケートに人生で初めて自分が何かやれる明確な手がかりを掴んだという興奮をもたらした²⁴⁾。

2. 子どもの発見と生活形態の確立

1878年7月、アドラーはカリフォルニア州サンフランシスコで、幼稚園の開設を訴える講演を行い、西海岸初の無償幼稚園シルバー・ストリート幼稚園が設立された。マーウェデルの養成学校を卒業したケートが、マーウェデルの薦めで、サンフランシスコのスラムに開設された、この幼稚園の最初の教師となった。

ケートはカウンセラー、医者、母親、看護婦、衣食の供給、守護者といった多くの役割を一身で担うよう期待され、期待以上の成果を残した。不衛生で、酒に溺れ、犯罪に走る者が多かった近隣の親たちが衛生的で、酒を止め、美德を示し始めたのである。そうした結果はケートへの敬虔な畏敬であり、熱狂的な賞賛によるものであった²⁵⁾。

このケートによる献身的な姿は後述することとし、まずはシルバー・ストリート幼稚園開園当初の子どもたちと母親の様子を見ておこう。

スラムで育つ40名の子どもたちはなかなか一筋縄ではいかない事情を家庭に抱えていた。30名の園児は何事に対し

でも全く関心を示さず、犠牲者の如く大人しいのに対し、残りの10名は対照的に金切声を上げて怒鳴ったり、泣きわめいている。どの子の母親も、髪を振り乱し、かみつくような目で子どもを見つめ、短気な様子はその上気した赤い顔に現れていた。ウィギンを見る子どもの目は、不安そうに怯え、登園最後の母親が子どもをさんざん殴って立ち去った途端、それまで静かだった数人の幼児が泣き出し、まったく手の付けようがなくなった。たまたま顔を出した近所の少女が泣いている幼児を砂場に連れ出し、教室に戻った静寂もつかの間、子どものお大半が自分の名前と年齢、性別・住所を知らないため、それぞれの確認に手間取る始末であった。やっと教室の前方に年少児、後方に年長児を座らせ、秩序を取り戻したが、子どもの手は余りにも汚く、紙を使わせることはできない。急遽思いついた「石鹸とタオルを持って、庭の手洗い場で手を綺麗にしましょう」というケートの提案は、大人しく座ってたくない子どもたちに快く受け入れられた。ところが、子どもたちは理由もなくけ飛ばしたり、殴ったりするため、階段を一列になって降りることさえ苦勞を要した²⁶⁾。

マーウェデルによれば、その苦勞はケートを極度の不安に陥れた。最も野蛮なタイプに属する浮浪児たちは、初日から喧嘩を引き起こし、引っ掻き傷、鼻血や顔の傷を負う者を続出させた。それはケートに予想を超えた腹ただしさと辛苦を与えたのである。2日目、ほんのつかの間の静寂が悪い予感を募らせた矢先、火災報知器が鳴り響き、子どもたちは近くの火事を見に行こうと慌てふためいて飛び出していった。注意の声はまったく無視された。彼女は思わず抱き止めようと手を出したが、無駄だった。大粒の涙が彼女の睫を濡らしてこぼれ落ち、彼女の顔は悲嘆の表情に包まれた。彼女はサンタバーバラの平和な家庭と学校を捨てたことを心の底から深く悔いながらソファーに身を沈めた。しかし、全員の子どもの手は日ごとに不規則な行動を改め、喜んで従うようになった。「陽気なイタリア」の音楽家たちの騒音や、オペラとはとても思えない耳を塞ぎたいような大声も、ケートの平静を乱すことがなくなった。数人の子どもの変化は劇的であった。大酒のみで、強い酒を小売りして不安定な生計をたてていた親は、悪意に満ちたいたづらを繰り返して手に負えない4歳の子どもの幼稚園に送り込んできた。彼の野蛮さは幼稚園でも目に付いた。仲間に対して横柄で、ちょっとした挑発で攻撃を繰り返した。身勝手に反抗的な彼は、ケートの指図をことごとく破り、彼の出現によって教室は恐怖に包まれた。しかし、彼は仲間を喜んで手助けできる立派な子どもに作り変えられ、クラスの人気者になった²⁷⁾。

さて、こうした手もつけられない子どもたちが作り変えられ、人気者になる秘訣はどこにあるのか。その1つとして考えられるのが、父性を発達させるために開発した新作遊戯「Master Rider」である。こうした改良に着手したのは、弱い性、鳥・花・昆虫、傷つきやすい感受性、美に対し浮浪児集団が極端に攻撃的であることに気付いたからである。『母の歌と愛撫の歌』の「家鳩」では、巣の中のひな鳥といえるのは母鳥である。ケートはこのゲームに父鳥を導入した。幼稚園のほんの短い時間であり、遊びの精神の中で十分に清められたわけではないが、少年たちは一般的に父鳥の役を務めた。というのも、部屋中を餌を求めて飛び回るといった活動的で男らしい動きがひな鳥の世話に対する反感を覆うことができたためである。これができるようになった後、新作遊戯「Master Rider」で遊んだ。この遊戯には、木馬に乗ってはね回り、さまざまな冒険を耐え抜き、ついには妻や子どもたちのために贈り物を持ち帰るといった内容が含まれていた²⁸⁾。順に、一般的な子どもの生活経験を盛り込みながら、ケートらは遊戯の大きな改変を試みることによって、子どもの諸能力の自己進展を図ったのである。この生活の組織化が野蛮な子どもたちに秘められた諸能力を開花させ、人気者へと作り変えていく。

マーウェデルの教えを守り、フレーベルの原理をゆがめないように遊戯やゲームの改良を進める中で、「注意深く選ばれた幼稚園の歌とゲームの言葉は子どもに思考を暗示し、思考がジェスチャーを誘発し、メロディが霊的感情を生み出すことを発見した²⁹⁾」。「幼稚園教師の目的は、フレーベルを偶像にするのではなく、理想とすべきだ³⁰⁾」と主張するケートは、「4、5歳の子どもはなお物体や具体的に興味を持っている。彼は観察したり耳を傾けたり、調べたり手で働きかけたりすることを欲するものであり、子どもの腕を制止し、活動的な指をじっとさせたり、アルファベットのような鎮静剤で、子どもを無感覚にすることは何と馬鹿げていることか」と子どもの本性を損なう方法を批判した³¹⁾。ケートらによって開発された遊戯やゲームは、本能的かつ衝動的な手や身体の動きを禁止して静かにさせるためのものではなく、それらを望ましい方向へと導いていく手段であると同時に、野蛮な子どもたちが目指すべき生活形態そのものであった。

Ⅲ. 母親教育と幼稚園運動

無償幼稚園の普及は子どもの科学的研究の必要性とともに、母親の果たすべき教育的役割の重要性を認識させた。1893年、シカゴで開催された世界コロンブス博覧会（以下、シカゴ博と略す）では、幼稚園の公開・実演に加え、科

学的な理論に立脚した子育て法がさまざまな手段を用いて提示された³²⁾。シカゴ博を通して、ベルリンのペスタロッチ・フレーベル・ハウスの指導者、シュラーダーの思想と実践が紹介され、アメリカの幼稚園指導者に影響を及ぼした。彼女は女性の真の解放を志し、そのためには女性を「精神的母性」にまで教育し、女性としての本領を発揮し得る生活分野あるいは職場を女性に保障すべきだと唱えた。こうした「精神的母性」を求める動きは翌94年、シカゴ市で開催された母親会議、さらに97年の全米母親会議（National Congress of Mothers）へと発展し、しかも階層を問わず母親たちが幼稚園教員養成のための教育科学の基礎を学び始めた。

1. シカゴ博から全米母親会議へ

シカゴ博の象徴は、子ども館（Children's Building）であった。子ども館1階には、応接室、集会室、設備の整った体育館、子ども部屋教室が並んでいた。また、2階には幼稚園の保育室、手工室、遊戯室のほか、幾つかの部屋があった。部屋に入った子どもは天井、窓、小壁、羽目板に目を奪われる。そこには、子どもの生活や遊び、世界の童話の挿し絵が描き出されていたが、それは殺風景な教室に慣らされた子どもを魅了した。内装は熟練した幼稚園教師によって施され、まさに子どもの宮殿に相応しい環境が整えられていた。各国の子ども服を着たマネキンが並べられ、子どもの生活に最適な食事、着物の着方、養育の方法などが実演によってわかりやすく解説される。子ども部屋の一角には、各国の玩具やゲームなども展示されていた。この中で、年長の子どもは、幼稚園に預けられ、十分な保育を保障される一方、母親は安心して博覧会を見学するゆとりと、保育中の幼稚園を観察する機会が与えられた。さらに、ここに幼稚園文献出版社が本部を置いて、幼稚園に関する情報を母親たちに提供した³³⁾。

この博覧会でアメリカの幼稚園指導者に強い影響を与えたペスタロッチ・フレーベル・ハウスは、シュラーダーが指導する一大総合施設であった。フレーベルの弟子であり、姪の娘であったシュラーダーは1873年、マーレンホルツ・ビューロー夫人（Marenholtz-Bülow, B.）の指導下にあった民衆幼稚園を引き受け、その財政的支援のために「ベルリン民衆教育協会」を結成した。これに媒介学級、労働学校、初等学級、学童ホーム、料理・家政学校、幼稚園教員養成所などを付設。貧民の保護と教育、「居間の教育力」の重視、労働の教育的意義といったペスタロッチの考えを高く評価し、「ペスタロッチとフレーベルの融合」を目指した。1878年、これらの施設をペスタロッチ・フレーベル・ハウスと総称した。労働者や貧民の子女の保護と教育に献身したシュラーダーは、家庭的な暖かさ子どもたちの多面的な発達を促す飼育、栽培、手工、料理、掃除、フレーベル式作業などの創造的遊びと仕事を幼稚園に導入した³⁴⁾。

こうしたシュラーダーの保育に関心を示したハリソン（Harrison, E.）は1890年、訪独した。ベルリンでシュラーダーと会見したハリソンの目には、掃除、料理、庭仕事といった家事仕事が極端なまでの「実利主義」と映った³⁵⁾。一方、ドレスデンでマーレンホルツ・ビューローと会見したハリソンは、子どものニーズや環境に応じた変更を認めながらも、『母の歌と愛撫の歌』にはすべての子どもに必要とされる基本的経験が示されていると高く評価する夫人に強い共感を覚えた³⁶⁾。

話が前後するが、ハリソンは1883年、シカゴ幼稚園クラブを結成し、幼稚園運動の推進と幼稚園教師の研修の場を整えた。翌84年には、母親学級を結成し、これをもとに養成課程を開講した。呼びかけに応じた母親は少なく、彼女を落胆させたが、教会宗派に強い影響力を持っているクルーズ夫人（Mrs. Crouse, J.N.）によって、一気に45名が加わり、87年にはシカゴ幼稚園教員養成校（Chicago Kindergarten Training School）を開校。1891年、ハリソンは養成課程を2年から3年に延長し、シカゴ幼稚園教員養成大学（Chicago Kindergarten College）と改称した。

1894年のシカゴ母親会議は、こうした母親教育に研究の主眼を置いているハリソンのシカゴ幼稚園教員養成大学において開催された。『幼稚園雑誌』は、このシカゴ母親会議を「教育史の画期的出来事」と称え、フレーベルが「母親学」と呼んだ研究への興味を国中に広めるのに成功した点として、会期3日間で、参加した親たちの間に、子どもを正しく教育するためのより深く、より実践的な知識への渴望が膨れあがったと記している³⁷⁾。医者、ハリソンら幼稚園関係者、デューイ（Dewey, J.）ら哲学者・教育学者などによる話が親たちの関心をさらに深めたことは想像に難くない。

シカゴの会議を契機に開催された全米母親会議（National Congress of Mothers）もまた「子どもたちを改良するのではなく、彼らを道徳的、身体的、精神的に育成するように母親を導くこと」に目的があった³⁸⁾。そして、全米母親会議の開催によって、誰もが経験を交換することや、児童期の問題や教育の研究、家庭生活に影響を及ぼす地域社会の問題のために考案された地方での母親会議が望ましいことを疑わなくなった。フレーベルが「聖職」と呼んだものを準備しながら、富裕な家庭の女性も貧しい家庭の女性たちも、幼稚園教師として養成するための教育科学の基礎が教えられるようになった³⁹⁾。では、母親たち、特に無償幼稚園に通わせていた貧しい階層の母親教育がどのように行われたかをシルバー・ストリート幼稚園での実践から明らかにしておこう。

2. 子どもの守護者としての幼稚園教師と社会改良

シルバー・ストリート幼稚園で、ウィギンを悩ませたのは子どもたちだけではなかった。開園当初の記録が示すように、子どもたちは極めて不衛生かつ不道徳な状況に置かれていた。子どもを清潔に保つには親たちの協力が不可欠だが、親の態度は敵対的である。それゆえ、子どもが不潔にしていると学校にはいけないと話そうものなら、親との関係はもっとこじれてしまう。ウィギンはまず、母親と友好的な関係を築くために、友達になってよく観察することに務めた。それは子どもの場合と同じ態度である。母親の悩み、秘密、ゴシップなどを嫌がらずにじっくり聞き続けるカウンセリング・マインドの態度を崩すことなく、その話の中から母親の自尊感情やその優れた特性を見極め、働きかける教師としての努力を惜しまなかった⁴⁰⁾。

敵対的であった母親たちも、こうした献身的な幼稚園教師に、次第に友好的な態度を示し始めた。ケートは、この間の事情を次の様に述べている⁴¹⁾。「袋小路の間の、子どもの家の扉に通じる階段をよるめきながら上った時、その長屋の一番上の窓から一人の婦人の甲高い叫びが聞こえた。それは敵対的な口調ではなかった。『散らかっているものを片づけな。がきどもの先生が来るよ。子どもの守護者が来るんだよ。』これを聞いて私は微笑んだ。『何と共感的な翻訳ではないか。……キンダーガルトナーは子どもの守護者になった。この呼び名に祝福あれ。どんな高貴な尊称よりも、この新しい呼び名ほど嬉しいものはない。』」幼稚園教師の献身的な努力は貧しい親との揺らぎない信頼の絆を結び、敵対的な態度を敬虔な畏敬と熱狂的な賞賛へと変化させた。

ウィギンは子どもの幸福を権利と捉え、その権利を保障するには母親は言うに及ばず社会の責任が問われるべきだと主張する。その主著『子どもの権利』において、次のように語っている。親が子どもを残酷な動物のように虐待する時、親から引き離し州の監視下に置くように決めたのはさほど古いことではない。児童愛護協会が動物愛護協会よりも後にできたことを見ただけで、福祉政策の遅れがわかる。そして、子どもの権利の福音であるルソーの『エミール』を高く評価しながら、子どもの5つの権利を主張した⁴²⁾。

第1は、健康な心身をもって生まれる権利である⁴³⁾。「環境は子どもが誕生する前から影響を及ぼすという点では生理学者も心理学者も同意している。しかし、近代科学もその影響力が始まる時期やその期間、さらにどの程度、決定され修正可能かについては仮定できていない」と言い、妊娠が意識される前から無数の刺激が母親を通して子どもに影響していると指摘するに留めている⁴⁴⁾。このように考える背景には、マーウェデルの影響があったものと思われる。

マーウェデルは、子どもがその可能性を十分に開花させるには、母親が幼稚園の教育哲学や技法を学ぶことによって「自覚的母性」を獲得する必要があると唱えていた。しかも、その時期は母親が自らの妊娠を知った瞬間からで、幼児の教育は子宮内から始めるべきだと主張していた⁴⁵⁾。

第2に、発達に相応しい児童期を送る権利である⁴⁶⁾。子どもが親の規準にはめ込まれ、急かされたり、悩まされている。その一例として、ウィギンは服装をあげている。彼女は絹の帽子、ひだ付きのシャツ、金のバックルで締める靴、子ども用の手袋やステッキ、ベルベットのスーツで着飾った子どもを見るたびに、児童期に重要な経験が奪い取られ、大人のように振る舞うよう期待されている子どもの不幸を感じるのだと言う。子どもは最初の10年間にその後の発達に重要な成長を遂げる。犬と戯れたり、砂を掘ったり、家畜小屋に入り込んで仕事を手伝ったり、雑草を引き抜いたりすることによって、自然や他者とのかかわる基礎を学び、想像力・創造性を育む。親たちはそうして経験を奪うことによって、子どもが自由で平穏かつ健全な児童期を送る権利を侵している。ウィギンが田舎の子どもは都市の子どもに比べて3倍も幸せだと言うのも、メイン州ホーリスで過ごした彼女の満たされた児童期を振り返ってのことであろう。

第3に、子どもに相応しい場所、物、環境が整えられる権利である⁴⁷⁾。子ども部屋や子どもサイズの家具・遊具などを整備することである。子どもは好奇心旺盛で、大人と同じ事をしたがる。ウィギンは自分の甥が守りが居ない間、彼女が仕事に夢中になっている居間をうろつき回り、真珠を散りばめたオペラグラスを取り上げたようとした例をあげながら、子どもに相応しい環境について説明する。彼女は甥に「ダメ、それは大人のものよ」と言ってその動きを止めさせた。しかし、甥は「子どもが使っているところはないの」と物欲しそうに聞き返したという。子どもの欲望を人為的に刺激することなく自然なものにとどめるために、子どもの力に相応しい環境を整える必要があると主張している。

第4に、公平な教育を受ける権利である⁴⁸⁾。自由な相互批判が許される社会になったが、子どもは依然として親の権限に服従することが求められているとウィギンは言う。親は子どもが疑問を差し挟むことを好まない。それゆえ、幼児にさえ口輪を填めたがる。特に、その傾向は母親に強い。母親は公平な教育・しつけを受ける権利を犯すことによって、成長・開花すべき子どもの心を覆い隠してしまうのだとウィギンは主張する。

そして最後が、子どもには善なる行為の見本とすべき具体例を期待する権利である⁴⁹⁾。子どもは感覚の中で生活し

ており、母親が身体・精神・霊の最も高次な教育を受けることによって、目指すべき善の極致を示す必要がある。社会改良の手段としての幼稚園の使命は、親、特に母親を教育することによって、子どもにその権利を保障することに他ならない。

無償幼稚園の母親クラスでは次のような点で、富裕階層の母親よりも配慮することが求められた⁵⁰⁾。講義時間は短く、その内容は単純かつ特定の分野に限定すること。退屈で閉じこめられた彼女たちの生活に快活さを与えるようにすること。そのために、まず教師は最も素敵な長上着を身につけ、社交的な雰囲気醸し出しながら、母親たちにお茶やコーヒー、クッキーなど軽食のサービス役も務める。居心地よく飾り付けられた部屋に入った途端、母親たちの目に飛び込んでくるのは、真っ白なクロスの上に並べられた美しい花のテーブルである。ピカピカのスプーンが添えられたかわいいカップにお皿、凝ったランプに湯沸かしなどが別世界へと誘う。会合の最初の目的は、女性たちが普段の生活では見たり、聞いたりできない素晴らしい絵画や甘い音楽に触れることによって、わずかの間でも幸せを感じることにある。背負った重荷を下ろし、悲しくつらい思いに下がった口元が少しでも引き上げられれば成功である。そして、幾分恥ずかしげで戸惑っていた母親たちも徐々に会合の本来の目的である親の任務を学び取っていく。無償幼稚園の教師たちは子ども同様、深い愛と理解をもって母親を支え、信頼の絆を結ぶことに務めたのである。

おわりに

ケート・D・ウィギンはシルバー・ストリート幼稚園において、活発かつ創造的な活動が織り込まれた子どもに相応しい、豊かな生活を組織化することによって、気まぐれで理由のない欲望に駆り立てられていた子どもたちの変容をもたらした。それは言い換えるなら、子どもたちが本能的に持っている無秩序なエネルギーを創造力へと向かわせるような遊びを開発し、それによって喜びと幸福感を充足させた。善なる感情や協調性を教え込むのではなく、遊びを通して子どもたちに学び取らせようとしたのである。ウィギンはマーウェデルによって示された教育方法に基づき、彼女自身の遊びの原体験を通して、幼稚園に子どもが目指すべき生活形態を確立していったものと考えられる。

しかも、その同じ態度が親たちとの関係においても貫かれた。ウィギンの姿は、子どもの第4の権利である善の極致であり、母親が目指すべき見本である。幼稚園の教育哲学や技法を科学的に学ぶ点では、富裕階層の母親に負けるスラムの親たちも、幼稚園教師の献身的な愛への敬虔な畏敬と熱狂的な賞賛では負けなかった。

こうした無償幼稚園教師と子ども、保護者との関係は19世紀のアメリカのみならず、「キレル」子どもへの対応に苦慮する現代のわが国の幼稚園教師にとって大きな示唆を与えるものと考えられる。

注

- 1) Vandewalker, N.A., *The Kindergarten in American Education*, Macmillan Co., 1908, pp.56-58.
- 2) 拙著「無償幼稚園の発展とセツルメント事業」『日本の教育史学』第38集, 1995年, 306-324頁を参照。
- 3) Vandewalker, op.cit., pp.67-68. Beatty, B., *Preschool Education in America: The Culture of Young children from the Colonial Era to the Present*, Yale University Press, 1995, pp.98-99. Marwedel, E., "Kindergarten Work in California," in H. Barnard (ed.), *Papers on Froebel's Kindergarten, with Suggestion on Principles and Methods of Child Culture in Different Countries*, Office of Barnard's American Journal of Education, 1881, p. 667.
- 4) Cooper, S. B., "Practical Results of Ten Years' Work," *National Conference of Charities and Corrections, Proceedings*, 16, 1889, p.188.
- 5) Fisher, L., "The Kindergarten," in United States Bureau of Education, *Report of the Commissioner of Education for the Year ending June, 1903*, Vol.1, Government Printing Office, 1905, p.694.
- 6) Shapiro, M.S., *Child's Garden: The Kindergarten Movement from Froebel to Dewey*, The Pennsylvania State University Press, 1983, pp.1-17.
- 7) Strickland, C.E., "Paths Not Taken: Seminal Models of Early Childhood Education in Jacksonian America," in B. Spodek (ed.), *Handbook of Research in Early Childhood Education*, Free Press, 1982, pp.321-340. 森田尚人「アメリカにおける家族の構造変化と子ども観・女性観の転回」村田泰彦編著『生活課題と教育』光世館, 1984年, 230-260頁。
- 8) 拙著, 前掲論文, 307-309頁参照。

- 9) Vandewalker, op. cit., p.18. Shapiro, op. cit., p.75.
- 10) Shapiro, pp.79-81. Betty, op. cit., p.68.
- 11) Shapiro, pp.77-78. Betty, p.69.
- 12) 谷川正己『フランク・ロイド・ライト』鹿島研究出版会, 1966年, 18-28頁。
- 13) Vandewalker, op. cit., p.23.
- 14) Wiggin, K.D., *My Garden of Memory : An Autobiography*, Houghton Mifflin Co., 1923, pp.2-9. ウィギンの研究では, Snyder A., *Dauntless Women in Childhood Education 1856-1931*, Association for Children Education International, 1972, pp.89-123が最も参考になる。
- 15) *ibid.*, pp.10-11.
- 16) Smith, N.A., *Kate Douglas Wiggin : As Her Sister Knew Her*, Houghton Mifflin Co., 1925, p.15.
- 17) Snyder, op. cit., pp.91-92.
- 18) *ibid.*, pp.94-95.
- 19) Wiggin, op. cit., pp.89-91.
- 20) *ibid.*, pp.91-92.
- 21) *ibid.*, pp.92-95.
- 22) *ibid.*, pp.95-96.
- 23) *ibid.*, p.96 & p.98.
- 24) *ibid.*, pp.96-97.
- 25) Marwedel, op. cit., p.667.
- 26) Wiggin., op. cit. pp.116-118.
- 27) Marwedel, op. cit., p.669.
- 28) Wiggin, K.. D., *Children's Right : A Book of Nursery Logic*, Houghton, Mifflin & Co., 1892, pp.64-65.
- 29) *ibid.*, p.50.
- 30) *ibid.*, p.51.
- 31) *ibid.*, p.53.
- 32) Sapiro, op. cit., pp.65-83
- 33) Vanderwalker, op. cit., pp.148-150.
- 34) 岩崎次男『フレーベル教育学の研究』玉川大学出版部, 1999年, 366-376頁。Allen, A.T., “Gardens of Children, Gardens of God : Kindergartens and Day-Care Centers in Nineteenth-Century Germany,” *Journal of Social History*, 19, Spring 1986, pp.444-445. アレンの文献によれば, ペスタロッチ・フレーベル・ハウスと総称したのは1880年となっている。ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの19世紀のシカゴにおける幼稚園改革に及ぼした影響については, 拙稿「19世紀末期のシカゴにおける幼稚園改革の系譜 — ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの影響を中心として —」『鳴門教育大学研究紀要』第13巻, 1998, 89-96頁参照。
- 35) Harrison, E., *Sketches Along Life's Road*, Stratford Co., 1930, pp.117-121.
- 36) *ibid.*, pp.128-129.
- 37) “Mothers’ Department : The Chicago Conference of Mothers, an Epoch in the History of Education,” *Kindergarten Magazine*, 7, Nov. 1894, p.211.
- 38) Hofer, A., “National Congress of Mothers : Every Father and Every Mother in the Land a Participant,” *Kindergarten Magazine*, 9, Feb. 1897, p.443.
- 39) Smith, N.A., *The Children of the Future*, Houghton Mifflin & CO., 1898, p.51.
- 40) Marwedel, op. cit., pp.669-670.
- 41) Wiggin, (no.28 above), pp.109-110.
- 42) *ibid.*, pp.6-8.
- 43) *ibid.*, pp.8-10.
- 44) *ibid.*, p.9.
- 45) Beatty, op. cit., pp.93-94.
- 46) *ibid.*, pp.10-14.
- 47) *ibid.*, pp.15-18.
- 48) *ibid.*, pp.18-22.
- 49) *ibid.*, pp.22-24.
- 50) Smith, (no.39 above), pp.51-56.

The Form of Child's Living in the Free Kindergarten and Mother's Education

— According to Educational Practice of Kate Douglas Wiggin —

Kimiyo HASHIKAWA

The purpose of this study is to discuss how effect Emma Marwedel's view of child and child care on great spirit in the work of Kate Dauglus Wiggin, outlining Kate work in the Silver Street kindergarten of San Francisco.

Kate Dauglas Wiggin was born in Philadelphia in 1856. After her father died, Kate moved to a small village in Maine. She gave there what she later recalled as an idyllic childhood by her stepfather. In 1876 the family moved to Santa Barbara, California. When her stepfather died, Wiggin turned to teaching to earn for living. She was introduced to the kindergarten by Caroline Severance, and attended Emma Marwedel's training class. Marwedel wished to cultivate children's observation on three students.

Wiggin returned to Santa Barbara to teach kindergarten and then moved to San Francisco in 1878 when Emma Marwedel asked her to become the first teacher of the Silver Street Kindergarten. The Silver Street Kindergarten was situated in the slum. It was obvious about Kate Douglas Wiggin's educational practice that she had taken thoroughly to heart Emma Marwedel's teaching that modification in materials and methods must be made but that Froebel's principles were sound to even the point of implementation.

Wiggin's writings on the kindergarten were collected in the book *Children's Rights*. In it she states what society's responsibilities ought to be toward the children. She stated five basic rights to which she thought all children should be entitled and provided detailed descriptions of these rights and what mothers should do to meet them.

First, like Marwedel, Wiggin thought children should have the right to be "well born". Second, she thought children should have the right to protected and unhurried childhood. Third, every child should have the right to a place of his own with appropriate surroundings which have some relation to his size, desires and capabilities. Fourth, children should have the right to fair discipline. They should be taught and governed by the same laws under which they would eventually live. Last, children should have the right to expect examples of good behavior from their parents. To fulfill all these rights for their children, the mothers needed to be trained by kindergarten teachers and others.

By historically tracing the above-mentioned Emma Marwedel and Kate Dauglas Wiggin's work, we would have a better understanding the form of child's living and mother's education in the free kindergarten.